

### 第3章 意識の変容

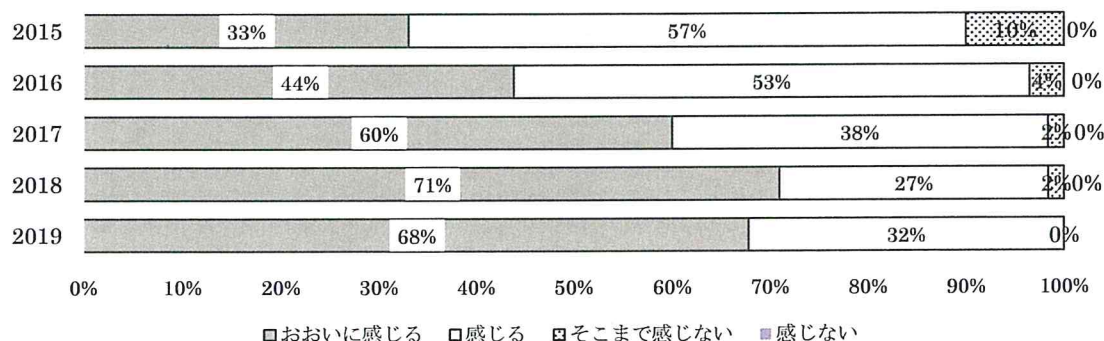
#### 第1節 教員アンケートにみる教員の意識の変容

毎年、12月に教員対象にアンケートを実施

##### 1. グローバル教育の意義や必要性

グローバル教育の意義や必要性を感じますか

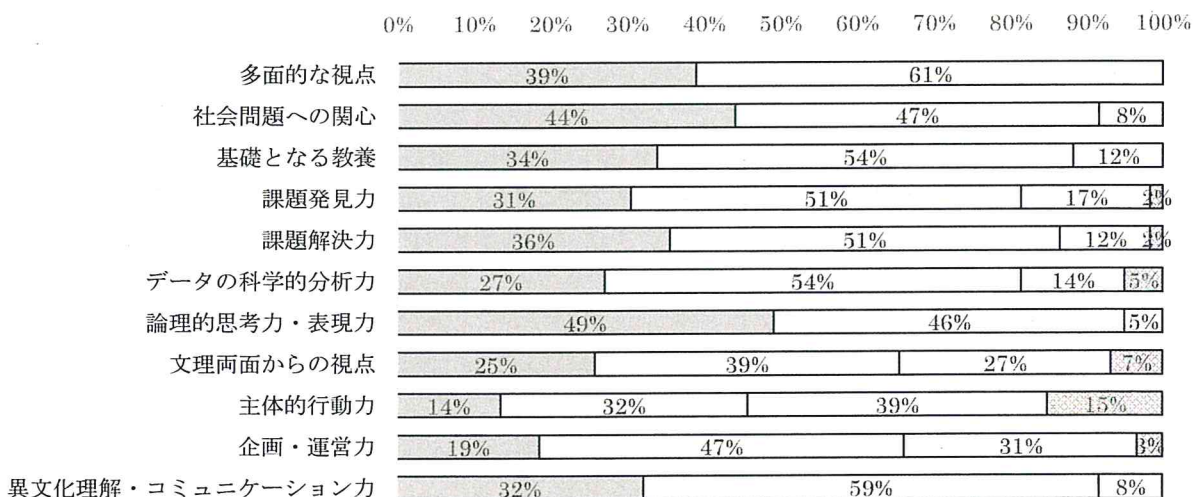
【グローバル教育の定義】急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決能力等の国際的素養を身につけ、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーを高等学校段階から育成する。



5年間の取組を通して、グローバル教育の意義や必要性については、肯定的な回答がついには100%となり、全校的な合意が形成されるにいった。

##### 2. 授業や教育活動を通して意識している能力の育成

各項目について、授業や様々な教育活動を通して、能力の育成を意識したり工夫したりしていますか

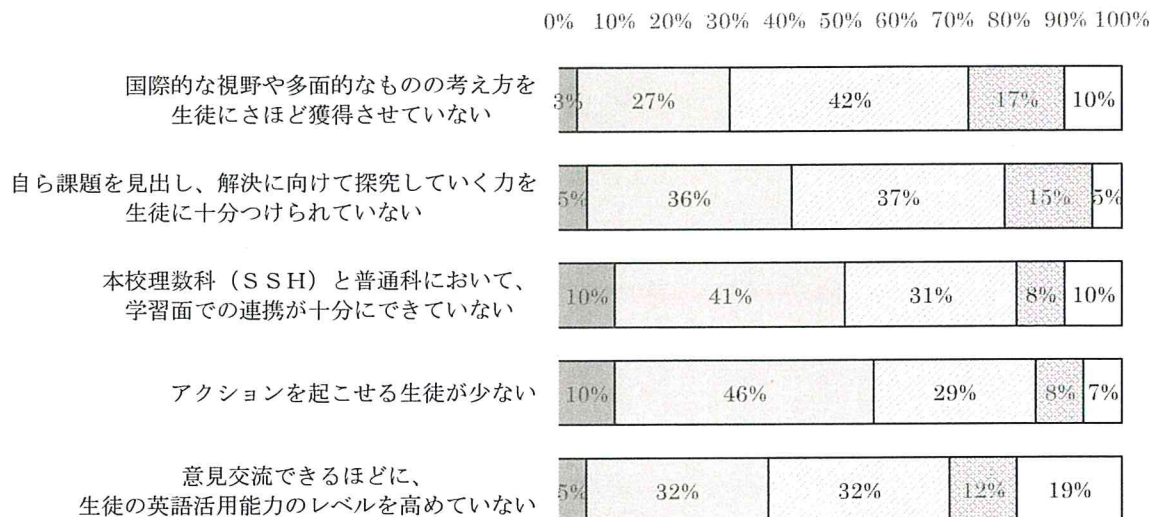


□とても意識（工夫）している □意識（工夫）している □あまり意識（工夫）していない □意識（工夫）していない

「多面的な視点」「異文化理解とコミュニケーション力」の項目が高いことから、異なる視点や立場から物事を多面的にとらえさせようと教育活動がなされていることがわかり、それが生徒の「協働性」の高さを引き出しているものと考えられる。一方で、「主体的行動力」については他の項目と比べてさほど意識されていないため、「主体的行動力」を高める工夫については「文理両面からの視点」とともに今後の検討課題といえよう。

### 3. 本校生徒が得意としている力、不足している力

4 年前の申請時の課題について、現在も課題であると感じますか。



□とても課題 □課題 □あまり課題ではない □あてはまらない □わからない

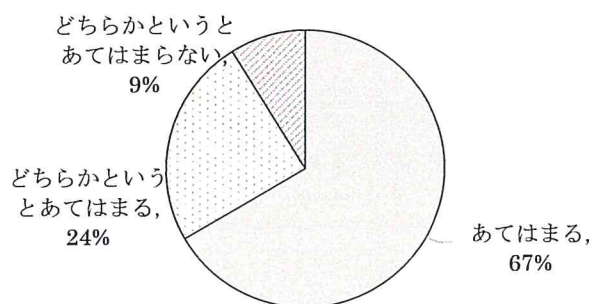
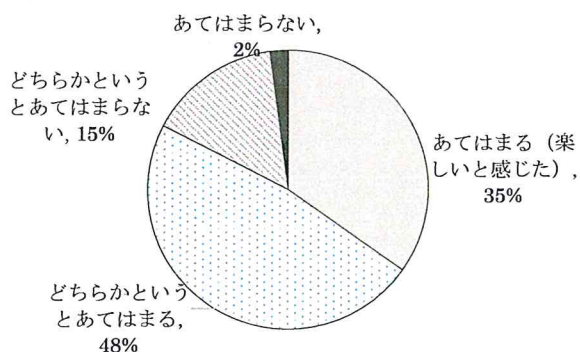
いずれの項目についても、「わからない」を除くと、本校の課題か否かについての評価は半々であり、評価が分かれている。中でも、「アクションを起こせる生徒が少ない」の項目については、まだまだ不十分であるとの認識が高く、より生徒の主体性を引き出す取組が必要といえよう。また、SSHと普通科の連携についても、引き続き研究課題として実現を目指していくことが必要であると考えられる。

申請時に、同様のアンケートをとっていないため断定することはできないが、これらの項目がもともと本校の改善すべき重点課題と認識されていたことを考えると、「とても課題」「課題」という回答を見たとき、この5年間での取組によって大幅に改善がなされた可能性があるのではないかと推測できる。

### 4. 探究学習（課題研究）の指導

授業を担当して、先生方は楽しいと感じましたか？（授業を担当された方のみ回答）

課題研究を実施することに意義を感じますか？（授業を担当された方のみ回答）



本格的に全校的な課題研究が開始されてから5年、ほとんどの教員が指導を経験することとなってきたため、探究活動の意義には90%超が理解を示している。少しずつそのノウハウも共有・蓄積されつつあるためか、楽しんで生徒の探究活動に寄り添うことができるようになってきた傾向も見えてくる。

## 5. 課題研究に関して本校として取り組む必要のある課題

課題研究の指導で困ったこと、悩んでいることは何ですか？（授業担当者のみ回答）

### 【課題研究の実施全般について】

- ・授業時数の少なさ（今年度は特に）。
- ・指導内容が授業時間外に及ぶこと。
- ・課題設定の難しさ。
- ・各授業内でのゴールを生徒に意識させながら、活動を行うことが難しいと感じる。
- ・教科の準備と同じくらい教員の準備が必要。

### 【教員の適切なかわり方・生徒の伸ばし方】

- ・どれくらい教員が介入すべきなのか、生徒の主体性とのバランスで迷う。
- ・問いの立て方など、具体的なアドバイスが難しい。
- ・専門分野以外の授業では生徒の興味関心を引くことの難しさ。（特に理系分野）
- ・どこまで手を加えて良いのか。生徒の主体性との兼ね合いが難しい。
- ・クラス間の指導の差を作らないようにすること。

### 【探究の質の向上】

- ・課題発見や解決策の提案に関して、考えがありきたりでクリエイティブな発想力を育成できていない。
- ・3年生は課題研究にかけられる時間がなく、インターネット情報ベースの深みのない課題研究になりがちである。
- ・生徒が考えた案を実行に移す難しさを感じた。

### 【PCなどのハードの環境】

- ・PCなどのハード面や、生徒のカリキュラムなどソフト面で、もう少し余裕がほしい。

## 6. 課題研究の指導を通しての教員の指導観の変化

課題研究の指導を通して、ご自身の教育観や生徒感、指導方法等に変化はありましたか？（授業担当者のみ回答）

- ・指導者の教養や経験、人脈がこれまでの授業以上に問われると感じるようになった。
- ・何事もできるだけ生徒に自分でさせるようになった。放任はだめだが、教員が手をかけすぎてもだめだということがわかったのが、大きな変化だ。
- ・自分自身が社会について見聞を広めたり、教養を身につけなくてはいけないと強く感じるようになった。
- ・教科指導以外にもいろいろなことにアンテナを張る必要があると感じた。
- ・生徒が街頭でアンケートをするなんてできるのか、という思いがあったが、生徒は意外と平気であったことに驚いた。能力が高い生徒たちなので、どんどんこのような経験をさせていけばいいと思った。
- ・生徒に「なぜ」を問う機会が増えた。
- ・アドバイスの方法を考えるようになった（生徒に考えさせる余地を残すにはどうするか）
- ・課題研究を通して自分の興味のある分野を見つけられ、進路指導にもつなげられる。さらに言うと、推薦入試の推薦書に書けるほど、深く取り組ませる必要があると感じた。つまり、課題研究に取り組ませることは、生徒の進路を考えさせる上でも大切だと思うようになった。
- ・高校においても、与えられた知識を習得するだけでなく、知識を活用し自ら疑問を持つということが大切だと感じた。
- ・生徒の力はまだまだ伸びるのではないか。自分たち教員が可能性を狭めることのないように気を付けている。
- ・生徒たちの教科では見えない長所や個性が見つけれられて有意義。クラスの人間関係作りにもよい影響を与えているように思う。
- ・本校の生徒たちが、自分たちで話をしながら研究を進めていく力はあるが、テーマ設定や研究をする上で物事を深める力をもっとつけていかなければいけないと感じた。
- ・テスト等では見えない生徒のクリティカルな考え方などに触れることが出来た。授業でそのような能力をつけるためにはどのような授業をすればいいのか考えるきっかけになった。

## 第2節 生徒アンケートにみる生徒の意識の変容

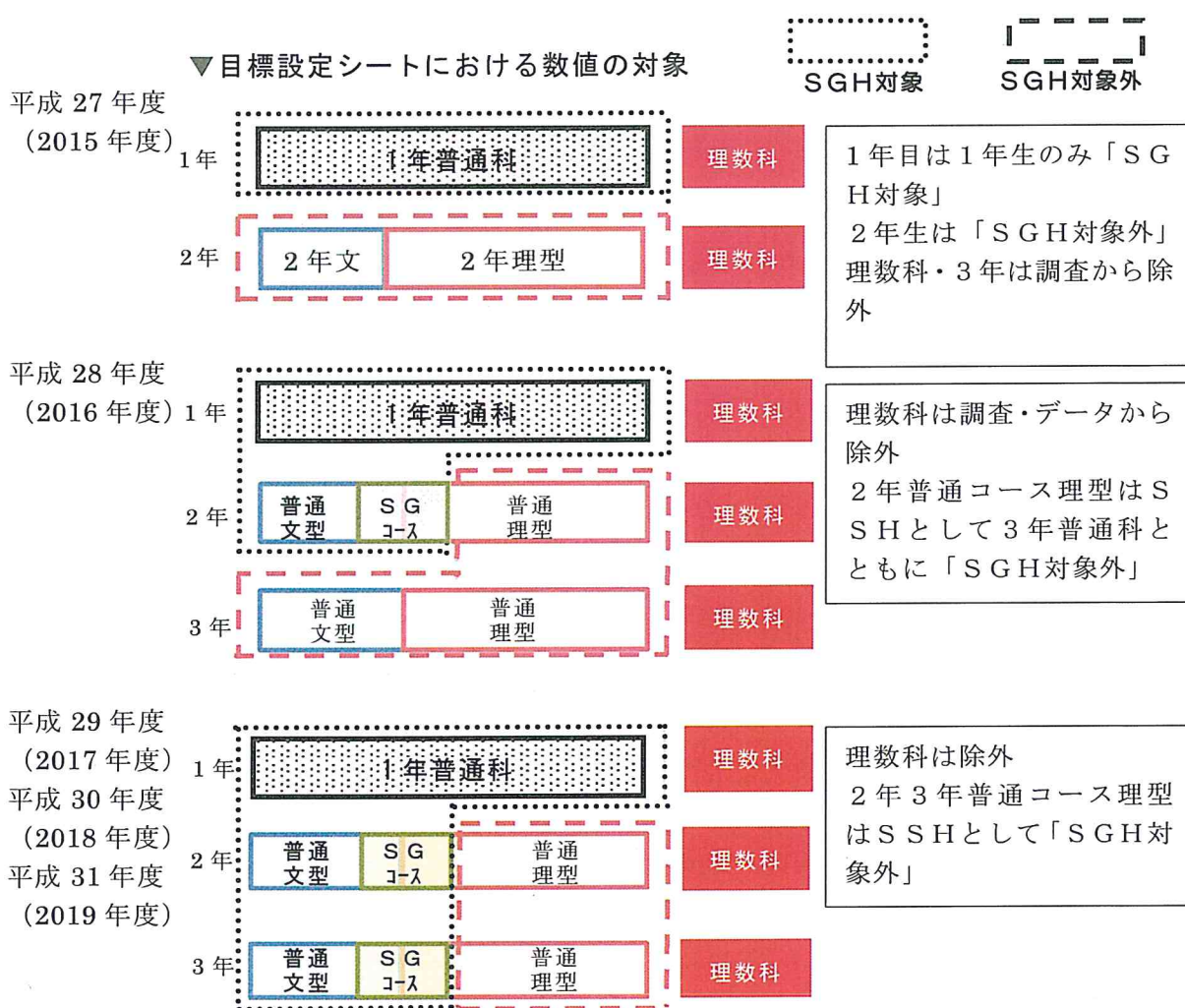
### 1 目的

SGH事業に関する評価として「生徒アンケート」を実施。研究開発の仮説に基づいた事業として成果を出しているかどうか、プログラムの進捗状況と合わせてその変容を確認するために、7月と12月に実施し、検証する。

#### 2-1 生徒アンケートの調査対象

目標設定シートにおいて、「SGH対象生徒」と「対象生徒以外」で比較することが求められているが、構想調書作成当初の調査計画では、SSH（理数科）の生徒も「対象生徒以外」の調査対象に含めている。本校SSHは4期目17年目となり、研究開発が先行しているため、数値の中に含めると、SGH事業の成果を測る上で混乱が生じるため、次のように調査対象を定義し直した上で、データを示した。

なお、開始後3年間は、段階的にSGH事業が拡大されていくため、データの分母が年度ごとに異なり単純な比較はできないことを、あらかじめ指摘しておく。



## 2-2 5年間の成果（仮説の検証）

問題意識

ア. 国際的な視野や多面的なものの考え方を獲得させられていない。

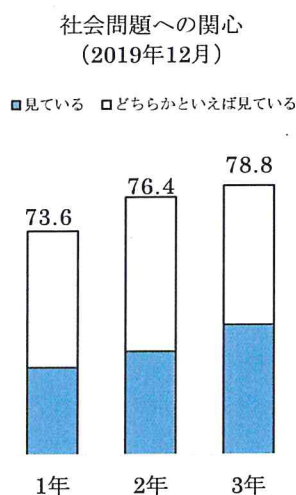
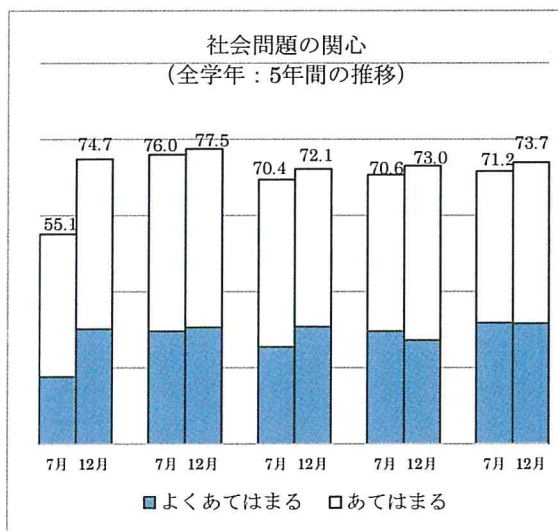
仮説1：1年次からの社会課題を題材に学校設定科目「SG思考基礎」「SG探究基礎」を通じて、「課題発見力」や「基盤となる教養・スキル」を身につけさせられる。  
〔国際的素養の育成〕

2つの学校設定科目で社会課題をテーマに学ぶ機会をもたせたことで、指定前に比べて社会課題に関心をもって情報収集を行ったり、問題意識をもつ生徒は増えたとと思われる。また、「SG思考基礎」や「SG探究基礎」などの課題研究での探究学習だけではなく、「グローバル・イングリッシュ」「リーディングスキルズ」等の英語の授業において、環境問題など最新の情報やテーマを扱うことで、様々な視点から社会問題に意識を向けさせるしかけも功を奏したといえよう。

グローバル社会の進展の中で、異なる文化や価値観について理解し、外国人をはじめとした様々な人たちとコミュニケーションをとろうとする姿勢は確実にこの5年間で醸成されていると感じる。SGコースの外国人との交流の機会はもとより、1年生全員に実施している「ディスカッション・デイ」といった外国人との直接交流する機会こそが、異文化理解の最も有効な方法といえよう。

異文化に対する理解が進む一方で、まだまだ海外へ飛び込んで挑戦してみるというマインドをもつ生徒が少ないように感じる。自らを取り巻く社会を相対化し、自らの軸を確立するためにも、高校・大学生年代における留学経験を今後より一層促進して

〔生徒アンケート〕 ○社会問題について関心をもって新聞、テレビ等のニュースを見ている



社会問題への関心は高

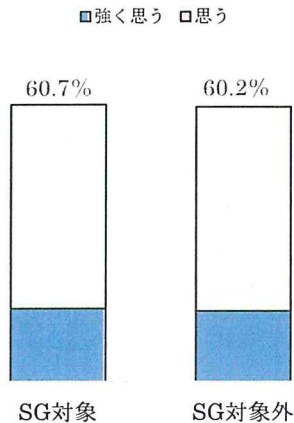
い

▲  
学ぶ意義の理解  
(知識の活用)

社会問題を題材とした課題研究は「主権者教育」でもある。

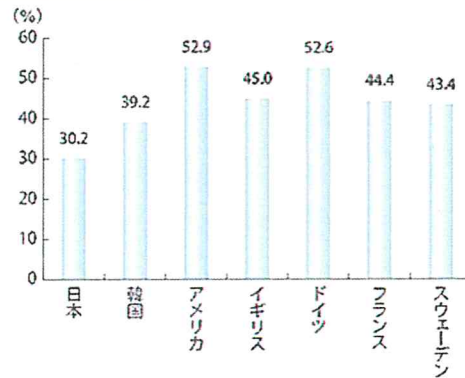
1年次の「SG思考基礎」、2年次・3年次の課題研究で社会問題を扱うことを通して、社会問題への関心を高めることができているといえる。また、3年次後半からは、受験勉強に大きくシフトしていくものの、学年間の比較を通して見ても、3年生が依然として関心が高いのが特徴（この3年間は同じ傾向）。これは、学習の意義が社会とのつながりの中で意識できるようになったことの表れだと推察できる。

現在または将来において自分が社会を変える一員になると思うか



参考資料

社会現象が変えられるかもしれない

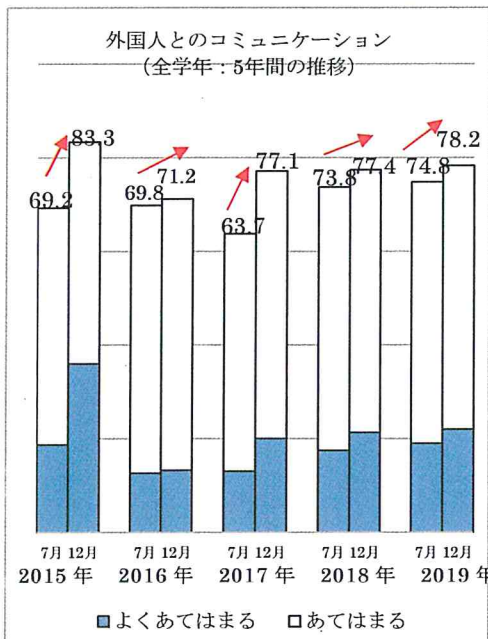


(注)「次のような意見について、あなたはどのように考えますか。」との問いに対し、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者の合計。

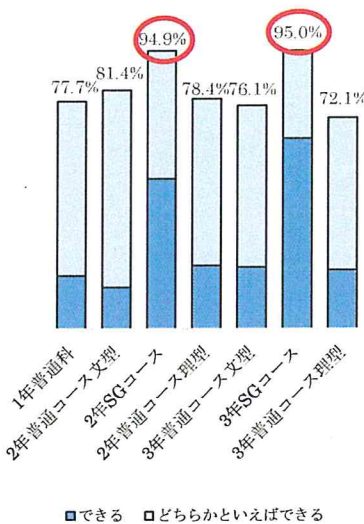
出典：「内閣府 平成 26 年度版 子ども・若者白書」よ

社会問題をテーマに探究活動を行うことで、高校生年代から実社会の課題を発見させ、その解決方法を自分事として考えさせることは、社会参画の第一歩となり得ると考えている。そうした社会参画へのマインドを問う設問について、昨年度までは、SG 対象と対象外とでは大きな差があったが、今年度はほぼ同じ比率となったことが大きな特徴である。これは課題研究が普通コースでも行われ、生徒の意識が全体的に高まったことが一つの要因と考えられる。いずれにしても、日本の平均 30.2%と比較したとき、本校での比率は約 2 倍となっており、より良い社会に変革するために主体的に社会に参画したいと考えているリーダーが育っていると推測できる。

【生徒アンケート】○外国人とのコミュニケーションで、異文化を理解し多様な立場から考えることができる



外国人とのコミュニケーションでの異文化理解力(2019年12月)



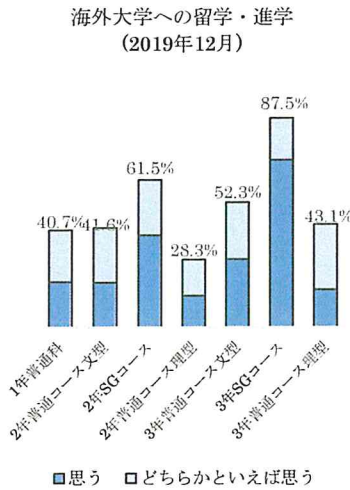
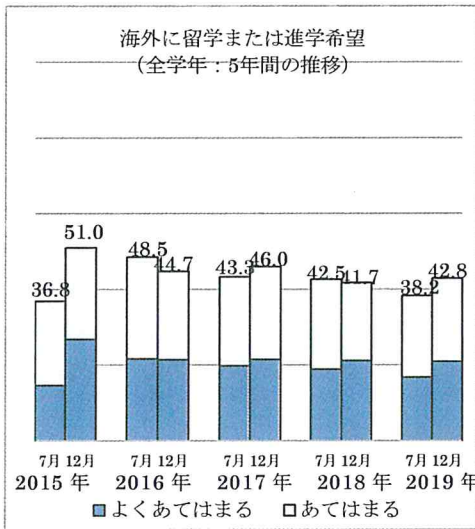
異文化を受け入れ外国人ともコミュニケーションに自信

▲ 実際の経験がカギ

多様性(ダイバーシティ)を受容する第一歩は、自分と異なる価値観とふれることである。

毎年、7月から12月にかけて向上するのは、1年生の「ディスカッション・デイ」(外国人留学生等との交流事業)、2年生の海外研修や修学旅行が、いずれも2学期にあるため、それらの実体験を通して、異文化理解における考え方や自信が変化することが要因であると考えられる。

[生徒アンケート] ○海外の大学へ留学・進学したい



依然として海外進学や留学には消極的

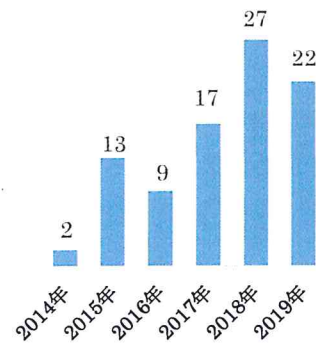
留学の必要性に鈍感

大学において海外留学・進学がキャリアパスにどのような有益なものとなるかを伝え続ける必要がある。

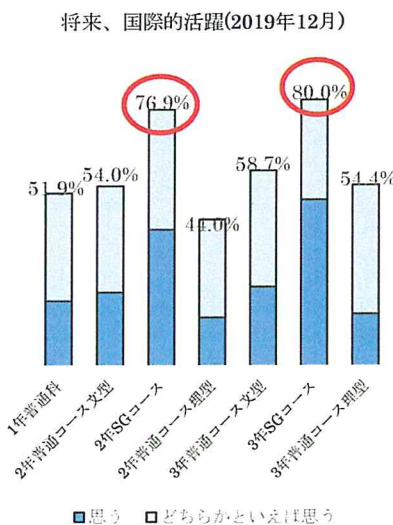
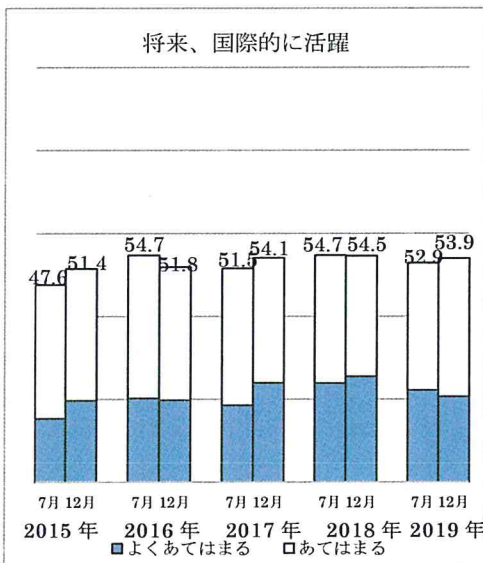
高校卒業後のビジョンの中で、海外大学への留学や進学を考えている生徒数はこの5年間さほど伸びることはなかった。その一方で、高校在学中に留学に行く生徒数は、確実に増えてきている。同年代の生徒が留学を通して意識が変わったという体験を共有する場「グローバル体験報告会」の成果が出始めているのではないかと考えられる。中でも、特筆すべきことは、1年間の長期留学者が今年度は6名も出た(昨年度1名)ということである。 ▼トビタテ！留学 JAPAN への挑戦者

	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
合格者	0名	4名	3名	3名	
応募者	7名	4名	11名	5名	8名

在学中に海外研修・留学に行く生徒数



[生徒アンケート] ○将来、国際的に活躍したい



普通コースにおいて低調なグローバルリーダーへの意欲

描けないグローバルなキャリアイメージ

今後、日本国内では完結しない研究や仕事のあり方を示していくことが必要か。

将来におけるビジョンでは、国際的に活躍したいという意志は、全体の50%前後という結果はこの5年間を通してなかなか変化してない。この間、「社会人と語る会」の中で、仕事とグローバル化の関連について話してもらっているが、意識の変化に大きな影響を与えるには至っていない。

イ. 自ら課題を見出し、解決に向けて探究していく力をつけさせる事ができていない。

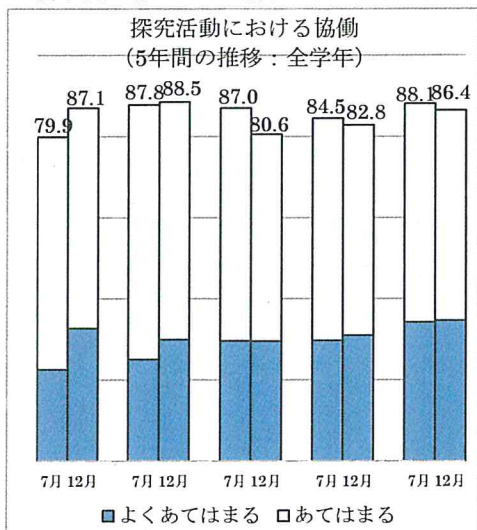
仮説2：「SG探究」等の課題研究を通して、“課題発見力”や“論理的思考力・表現力”“情報収集力・分析力”“ディスカッション力”を育むことができる。  
〔課題探究力の育成〕

課題研究を通して、ジェネリックスキル（汎用的能力）については順調に育成できていると考えられる。いずれの探究活動も、本校ではグループ活動を基本としているため、協働で合意形成を行っていく経験を多くもっており、こうしたスキルについての自己肯定感は高くなっている。

一方で、こうした能力についてのメタ認知が適切であるかどうかは、教員による見取りや評価によって確認しなければならない。その評価をフィードバックすることでメタ認知の向上を図る必要がある。また、外部のアセスメントの活用も研究をすすめていくべきである。

〔生徒アンケート〕

○探究活動で人と協働して目的を達成することができる

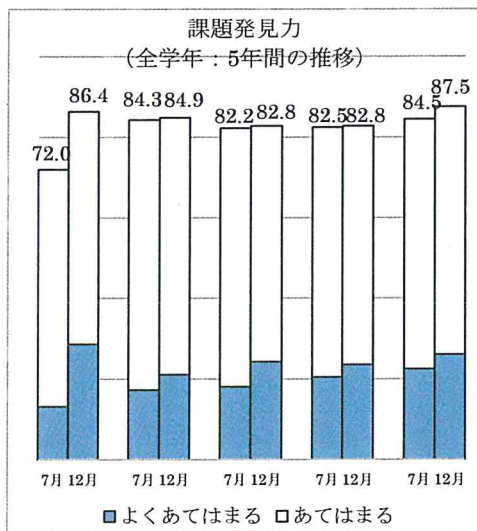


「協働」は得意  
▲  
グループでの課題研究

同質性の高い集団で発揮できる力を、異なる感覚や文化を背景とする集団においても合意形成に向けて発揮できるかが次のレベルの課題。

探究型学習やアクティブラーニングの機会を通じて、協働で学び合い、合意形成をする力は高いレベルで育まれているといえる。様々な授業においても、日常的に探究型学習やアクティブラーニングが定着してきた成果である。

○現状を分析し、課題を発見することができる



課題発見力に確かな自信  
▲  
課題研究活動の蓄積

与えられた機会や設定の中では、課題を見出すことができる。日常の様々な事象に対して問題意識を持ち、課題を発見できるようになるとより高次のレベルとなる。

課題研究において、テーマ設定を行う経験から自信を持っている生徒は多いと考えられる。

生徒の自己肯定感が高いのはよいが、一方で、「問い」の質を高める指導も継続的に研究していく必要があるだろう。



○客観的な根拠に基づいて結論を導き出せる



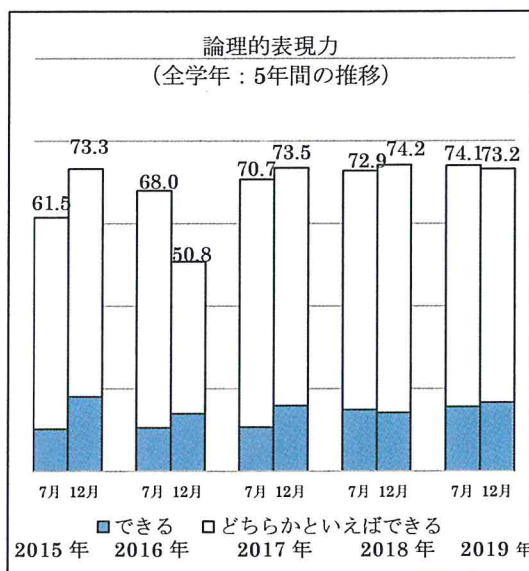
データ活用や確かな根拠へのアクセス  
に一定の自信

▲  
データの出典や主張の根拠が問われる  
質疑応答の機会(プレゼンテーション)

様々な発表の場に生徒同士による質疑応答の機会を導入することで、確実に「質問力」も意識されるようになる。

課題研究において統計学を導入しているのに加え、「SG思考基礎」において、「数値リテラシー」の学習を導入するなど、確かな根拠としてデータを活用するプログラムの成果が表れている。その一方で、課題研究の調査において、その対象や項目、条件などについてまだまだリテラシーが不十分であることを感じる機会がある。今後、課題研究のプロセスにおいて、教員による適切な指導や助言によって、そうした能力を高めていくことが次の課題である。

○ディスカッションで論理的に自分の考えを話することができる



ディスカッション等で論理的に考えを  
表現することに自信

▲  
プレゼンの機会・場が増加

グループでの協働による活動が多いため、自らの意見を相手に伝える経験は豊富である。また、年間に数回発表の場を設けることで、論理的に人に伝えることが求められる。

グループ内でのディスカッションや協働による合意形成、プレゼンテーションを行うにあたり、論理的に考えを伝えることが必要となってくる。そうしたプレゼンの場を提供することは、論理的な表現を意識する機会となる。しかしながら、生徒同士のグループ内の話し合いだけでは、論理が破綻していたり不十分であることに気がつかないことが多々ある。そのため、大人が質問や指摘を通して、その論理性や一貫性について評価をフィードバックすることが重要となる。さらに、生徒同士の発表の場で、質疑応答や意見交換を通して、生徒同士で論理の矛盾などを指摘できるようになることを目指したい。

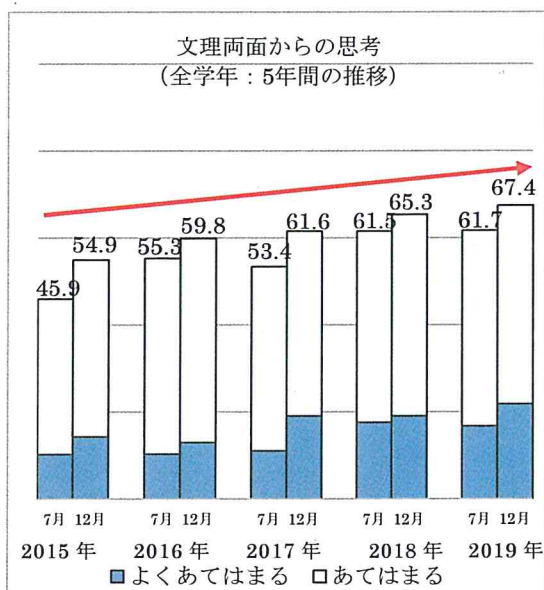
ウ. SSHと普通科の連携が不十分

仮説3：社会課題を題材とした研究においても、科学的な知識・技法を用いることで文理の枠を越え、複数の学問分野を俯瞰できる視野と考察力を身につけることができる。【文理融合による高度な思考力の育成】

SGコースの研究は文理融合の課題研究となるように、必ず文系・理系の生徒を組み合わせたグループ編成を基本としているが、指導者が必ずしも理系的な研究手法やノウハウを熟知していないことが多いため、十分な文理融合の研究に導くことができていない現状がある。この問題を解決するためには、理数科の課題研究と同期させることで、SGコースと理数科の共同研究を可能にしたり、定期的に理数科と研究の中間発表や意見交換の機会も増やしていくなどの工夫が必要であると考えられる。今後まだまだ開発の余地がある。

【生徒アンケート】

○文理両面の知識から、考えることができる



まだまだ途上ではあるが、5年間で着実に向上

▲  
教員の意識の変化

教科の専門性の高い高校教員の集団がいかに教科横断的な視点を持って生徒の指導に当たれるかが問われてくる。

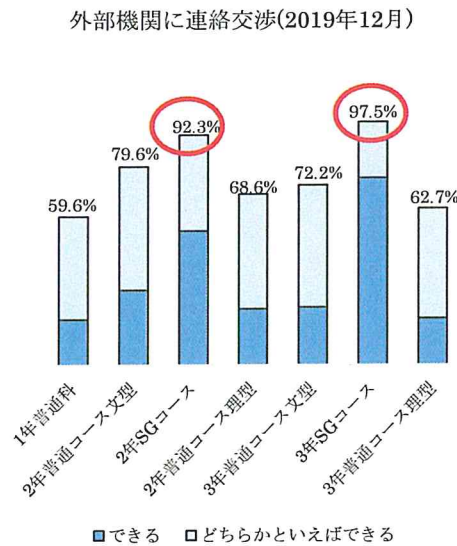
「文理融合」を掲げた研究開発において、理科と公民のチームティーチングを進める「SG思考基礎」といった取り組みだけではなく、それぞれの授業の中でも教員が意識をするようになってきたことが変化につながったと考えられる。それは、教員に対するアンケート結果（「意識している」の回答 64%）からもうかがうことができる。しかしながら教員全員が、理想とする「文理融合」のアプローチに取り組むことができていないかは、まだまだ不十分ではないかと感じる。今後も教員が自らの専門性のみならず、教科横断的で異分野融合を意識した研究を進められるよう促していきたい。

さらに、1年生で学ぶ「SG思考基礎」と普通コース理型の課題研究の接続について、より連続性をもたせるなどのデザインが必要である。また、SGコースと理数科の共同研究など、さらに両系統を横断する取組に挑戦していく余地もある。

仮説4：生徒自らが外部の機関や情報源にコンタクトをしたり、交渉することや発表の場を企画・運営することで、主体的な行動力を育むことができる。  
 【主体的行動力の育成】

この5年間の取組の中で、最も大きく向上した項目である。  
 当初、課題研究はネットや文献のみを拠り所とする“調べ学習”程度のものでしかなかった。そこで、現場に足を運び調査を行うフィールドワークを推奨した結果、生徒自身が外部の機関などに連絡・交渉をするようになり、研究の厚みが増しただけでなく、主体的な行動力の向上もみられるようになった。  
 また、SGコースの課題研究において、単なる机上の空論ではなく、「実践」を伴う提案を促すようになってからは、より社会に貢献する主体的な態度を養うことにつながっているように感じる。  
 さらに、3年時の「成果発表会」や「北信越フォーラム」の企画・運営についても、生徒自らが意欲的に取り組むなど、主体的な行動力は着実にはぐくまれている。

【生徒アンケート】○自らが外部機関に連絡を取り、情報収集を行うことができる



指定2年目(2016年度)の重点項目として、課題研究においてフィールドワークによる実証主義的な研究を推奨したことで、飛躍的に実践件数が増えた。それに伴い、主体的行動力に関する自信は高まった。その傾向は継続・定着している。3年次において、フィールドワークを実践する機会はないが、1年、2年の課題研究において、外部へインタビューや調査を実施した経験が自信につながっている。2年次以降、文型と理型とで差が生まれるのは、課題研究においてフィールドワークを行うかどうかの差であるといえる。

**主体的行動力は2年目以降に  
 飛躍的向上**

**▲  
 フィールドワークの推奨  
 (標準化)**

生徒にとって守られた世界である学校の外部との接触は不安で緊張を強いられるものであるが、実社会との交流は生徒にとって大きな自信と志を育む。

問題意識

オ. 意見交流ができるほどに、生徒の英語活用能力のレベルを高める事ができていない。

仮説 5 : 1 年次からの英語活用能力を高めるカリキュラムを開発実践することにより実践的な英語力を向上させることができる。

〔実践的な英語力の向上〕

SG コースでは、「成果発表会」の際に、英語で発表するだけでなく、質疑応答において即興的に適切な受け答えができるようになることを目指してきた。その成果は十分に達成できている。そこに至るために、海外研修をはじめとして様々な国際交流の機会を設けるのみならず、英語の授業の中でも時事的な話題などを題材としながら、フレキシブルに英語で議論や対話をする経験を積み重ねてきた成果といえる。

その手法は、1 年や普通コースの英語の授業にも適用され、学校全体で実践的な英語力向上に努めることが普及している。

〔生徒アンケート〕 ○英語でプレゼンテーションをすることができる

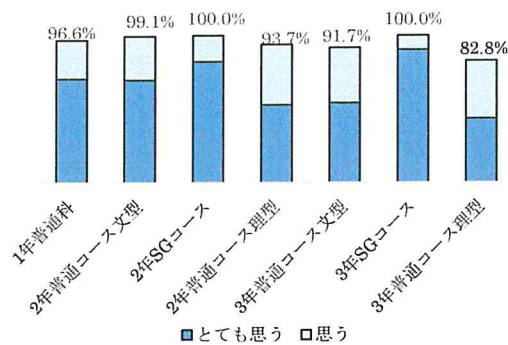


5年間を通して確実に向上

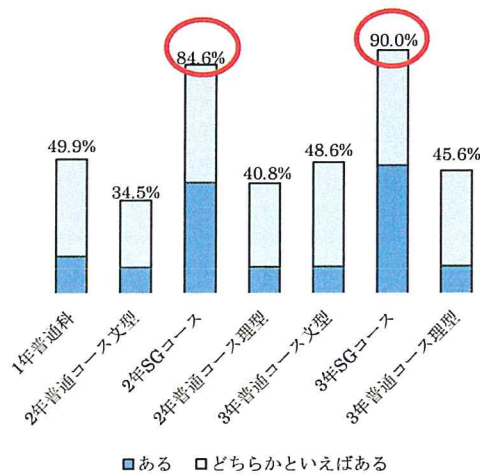
4技能を意識した実践的な英語の授業の普及

学校設定科目を中心に4技能型の英語授業を導入し定着。生徒にとって、授業以外にも活用する機会を提供することができれば、さらに向上が見込まれる。

高校時代から実践的な英語力の必要性  
(2019年12月)



英語でプレゼン(2019年12月)



5年間を通して少しずつ実践的な英語活用能力に自信を持てるようになってきたのは、授業の内容が変わってきたことの反映であろう。

また、コース別に見たとき、実践の機会のあるSGコースにおいて自信が醸成されているのは当然といえる。

高校年代から将来に活躍するために実践的な英語力を磨く必要性を感じる生徒が、コース・文理問わず、高い割合を示すようになってきたのは大きな変化である。

第5章 目標設定シート

【別紙様式7】

ふりがな	いしかわけんりつかなざわいずみがおかこうとうがっこう	指定期間	27～31
学校名	石川県立金沢泉丘高等学校		

平成31年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)										
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(年度)		
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数										
a	SGH対象生徒:		171人	77人	169人	132人	96人	80人(H29)		
	SGH対象生徒以外:		60人	70人	73人	37人	62人	60人	23人	100人(H29)
目標設定の考え方: 社会課題への問題意識の高まり, 社会貢献活動への参加増。(実数をアンケート調査)										
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数										
b	SGH対象生徒:		2人	4人	13人	23人	19人	20人(H29)		
	SGH対象生徒以外:		1人	2人	11人	5人	4人	3人	3人	2人(H29)
目標設定の考え方: 各種の取組による, 海外での研修に対しての積極的参加。(実数を調査)										
将来留学したり, 仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合										
c	SGH対象生徒:		36.4%	41.8%	77.9%	67.9%	62.2%	90%(H29)		
	SGH対象生徒以外:		60%	62%	52.7%	39.1%	64.0%	48.5%	53.9%	65%(H29)
目標設定の考え方: 国連大学との連携を通じての国際機関の取組や国連活動への興味・関心の高まり。(意識調査を行う)										
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数										
d	SGH対象生徒:		1人	2人	7人	2人	3人	4人(H29)		
	SGH対象生徒以外:		2人	2人	1人	17人	2人	0人	0人	2人(H29)
目標設定の考え方: 国連大学の取組による, 国連そのものへの興味増大, 模擬国連大会等の参加。										
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合										
e	SGH対象生徒:		36.9%	62.5%	97.3%	97.5%	100%	100%(H29)		
	SGH対象生徒以外:		2%	3%	53.5%	62%	—	—	—	10%(H29)
目標設定の考え方: 異文化圏の人々との交流による, 英語への関心のさらなる高まりによるTOEFL Junior 750点以上比率。(3年夏に調査)										
(その他本構想における取組の達成目標)様々なデータを駆使し、客観的な分析ができる生徒の割合										
f	SGH対象生徒:		79.6%	86.0%	78.9%	80.3%	80.8%	100%(H29)		
	SGH対象生徒以外:				86.1%	88.5%	74.5%	74.0%	79.5%	10%(H29)
目標設定の考え方: 課題研究論文を元にルーブリックによる評価を行う。										

\* eについては、平成28年度までは、TOEFL Juniorにもとづく推定値、29年度はTEAPのスコアより算出。なお、SGコース以外は受験しなかったためデータなし。

網掛けは目標達成年度

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	4人	8人	0人	41人	40人	153人	159人	40人(H29)
目標設定の考え方:SGH生への2年次海外研修全員実施。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	40人	40人	35人	44人	41人	41人	41人	40人(H29)
目標設定の考え方:1年次に希望者による留学生との交流,SGH2年次の全員国内研修。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	0校	2校	2校	2校	3校	3校	4校	3校(H29)
目標設定の考え方:欧米・アジアの3地域との提携、交流。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	4人	10人	51人	90人	89人	172人	222人	100人(H29)
2年次の課題研究に関わる指導・助言・評価等による大学教授・大学生・院生の参加。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	0人	0人	8人	22人	54人	40人	41人	50人(H29)
目標設定の考え方:1年次の特別講演2回実施,国連大学との連携による院生との交流。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	2人	0人	0人	32人	52人	12人	75人	80人(H29)
目標設定の考え方:課題研究を通じての,現実社会課題に対する関心の増大。(卒業までに参加を奨励)								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	0人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	2人(H31)
目標設定の考え方:海外からの留学生に対する受け入れ,交換留学の体制。								
先進校としての研究発表回数								
h	3回	3回	3回	1回	8回	9回	8回	6回
目標設定の考え方:校内発表2回,海外での発表1回。(SSHの発表を含む)								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i	×	△	△	△	○	○	△	○
目標設定の考え方:海外の高校などに向けての留学の受け入れ等を含む内容発信。								
(その他本構想における取組の具体的指標)探究活動における理系的手法の活用数								
j			0%	0%	25.0%	37.5%	12.5%	50%(H29)
目標設定の考え方:課題研究に理系的手法で取り組んだ生徒の割合								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)	1,156	1,192	1,200	1,200	1,200	1,195	1,201
SGH対象生徒数			360	520	680	635	675
SGH対象外生徒数			840	680	520	560	526

## 第5章 運営指導委員会

### 第1節「第1回運営指導委員会」

○日時：令和元年7月12日（金）

○会場：石川県立金沢泉丘高等学校 視聴覚室

○参加者（敬称略）

#### 運営指導委員

浅野 邦子（株式会社第一 代表取締役会長）

大樋 長左衛門（陶芸家・美術家）

福永 伸治（野々市市立布水中学校 校長、石川県中学校長会 会長）

#### 管理機関

樋口 勝浩（石川県教育委員会 学校指導課 課参事）

市澤 周治（石川県教育委員会 学校指導課 指導主事）

#### 学校側出席者

岡橋 勇侍（副校長）・米口 一彦（教頭）

石尾 和彦・二羽 みどり・上野 佑太・片岡 清志・酒井 智朗

（以上SGH推進室）

#### ○主な意見・助言

- ▶話す内容と、英語に変換すること二つのチャレンジをしている。プレゼン能力も素晴らしかった。ものを知っていなければ答えられない。日本語でさえ頭を使う。一つのことだけでなく、考える力とそれを英語に換える訓練が今はできているのだから、これを継続させてほしい。生徒に自信が付けば、世界に飛び出していけると思う。
- ▶昨年2年生のときの日本語の発表を見た。以前は自信がなさそうなグループもあったが、今回は自信をもって発表しているように見えた。チャレンジしてうまくいった部分、苦しみながらも達成できて良かった部分、大きな舞台を踏んだというのは生徒にとっても良かった。
- ▶課題がシンプルで、興味がわくようなタイトルを付けるようになった。シンプルにするまでが大変。大人が勉強になるタイトルになっていた。
- ▶今回、プレゼンテーションを見て感動した。自分が知っている生徒もいた。気にかけていた生徒が、生き生きと発表していたので、この学校に来てよかったと感じた。
- ▶こんなに良いプログラムなのだから、来年度から新しい科を創設する考えも必要なのではないかと思った。これを学んだ人たちがどんな大学に行って、どこに就職したか、追跡していけば、将来的にその人を呼んだりできるし、財産になる。このプログラムを続けられるように、私たちも努力したい。
- ▶SGHの指定を受けるときに、指定が終わったあとに管理機関として財政的な支援をできるという前提で申し込んでいる。どこまでが学校の望みで、県としてどこまでできるかすり合わせ、核になる部分は継続していきたい。泉丘高校が5年間SGHの取り組みとしてやってきたことを来年度以降継承していけるかが、喫緊の課題として考えている。生徒が変化の激しい社会を生き抜くためにどんな教育をしていく必要があるのか学校と話をしていきたいと思う。

## 第2節「第2回運営指導委員会」

○日時：令和2年1月24日（金）

○会場：石川県立金沢泉丘高等学校 視聴覚室

○参加者（敬称略）

運営指導委員

大樋 長左衛門（陶芸家・美術家）

管理機関

樋口 勝浩（石川県教育委員会 学校指導課 課参事）

市澤 周治（石川県教育委員会 学校指導課 指導主事）

学校側出席者

宮本 雅春（校長）・岡橋 勇侍（副校長）

石尾 和彦・二羽 みどり・上野 佑太・片岡 清志・酒井 智朗

（以上SGH推進室）

○おもな意見・助言

▶企業への提案までいっているグループもあったが、ビジネスまでもっていけないのは当たり前。質問している大人たちは結果を期待するが、高校生がこれだけの限られた時間の中で、そこまで提案できているだけで素晴らしい。逆に企画力やデザイン力が将来的に必要で、それらが無いとアイデアが具現化しないということに気づいてくれることが大切だ。聞いている方が、「なぜそこまで調べたのに、具現化するところまでやらないのか」と考えるのは間違い。時間が無くてできるわけがない。

▶私は温故知新ではなく「温新知故」という言葉を作った。新しい挑戦をした人は、ポロポロになりながら、でも古いことを知らずして学んでいく。それが今求められる新しい教育だと思う。ポロポロにならないと成功しない。それがこの学校でなされてきたことだと思うので、是非続けてほしい。

▶先生は安全志向が働き、生徒に失敗をさせたくないと考えがちだが、生徒にそれだけ仕掛ければ、それだけの成長がある。泉丘の生徒だからではない。他の学校でも総合的な探究的の時間が始まったが、どちらかという習熟度が心配だと思われていた学校で、生徒たちは探究活動に前向きで熱心に取り組んでいて、逆に他の教科・科目に関連性を見つけていくという良い効果が波及している。探究の効果を感じる。

校外への働きかけは今までの教育では無かったが、今は当たり前になってきた。生徒が今日の発表の中で、「調べたことを、だれだれに提案していこうと思う」と話していた。たくましさを感じた。高校生ならではの着眼点で提案することで、何かを変えることができると分かってくるのではないか。

令和4年になると、高校3年生が成年年齢となる。社会の一員として提案することになる。1・2年生で社会にどう貢献するかを考えることが大切になってくる。

▶泉丘はNSHの1校であり、石川県、全国を引っ張る学校でもある。SGH事業はここで終わりではなく、どういう形で続けていけばいいか、改良し発展していくにはどうするか、を考え続けてほしい。また教員間で探究の指導法を浸透させてほしい。